

特集・子ども文学この一年

☆総論

二〇〇八年の児童文学

佐々木赫子

(1) 二〇〇八年の出版ニュースから

前年の出版状況報告は通例、次の年の五月頃に出ます。従ってこの五・六月号の原稿を書く時点では、児童書の出版傾向について前年度の正確な資料が手に入りません。そこで、直接日本の児童書のことではありませんが、昨年〇八年五月中・下旬号「出版ニュース」に載った笹本史子の二〇〇七年の英国における出版状況の報告を紹介します。

報告の概要は「サブプライム問題にはじまる米国経済の低迷が英国の出版界にも影響している。話題になる本は有名人の伝記か「ミザリー・メモワール」と呼ばれる悲惨な体験記録ばかりだ。先行き不透明な経済状態の中で、売れ行き確実なジャンルに頼り、新しいものに手をだすリスクを避けている傾向がみえる」というものです。

笹本史子報告の半年前の〇七年末に、たまたまロンドンの書店で『No Way Home』という本をわたしは買いました。一九五〇年代に英国ケント州の児童養護施設で職員から虐待をうけて育った女性の体験記です。へ今もっとも読まれている本」と銘打って平積みされていたのは、そういうことだったのかと笹本解説で納得がきました。

〇八年には米国発経済不況が世界に広がり、日本でも派遣切り・失業・ワーキングプアなどが大問題となっているのは周知の通りです。出版についても、笹本史子報告の〇七年英国出版状況は〇八年世界出版状況の先駆けだったようです。国内では雑誌の売れ行き低迷と月刊誌のあいづぐ廃刊が報道されたし、前記「出版ニュース」も書籍・雑誌